

氏名	Aさん	Bさん	Cさん
学科(学部生)	日本文化学科	日本文化学科	日本文化学科
所属ゼミ	木村ゼミ	清水(敏)ゼミ	品川ゼミ
Q1 卒業論文のテーマ	「なぜ、賢治像は変わっていったのか ～戦後小学校国語教科書伝記教材における宮沢賢治像の変容とその責任」 指導教員: 木村直恵准教授	「藤田嗣治の戦争画」 指導教員: 清水敏男教授	「新宿内藤とうがらしに関する研究-文化的背景と呈味成分の特徴について-」 指導教員: 品川明教授
Q2 テーマを選んだ理由	小学生のときから宮沢賢治の童話が大好きで、大学の卒業論文で何でもよいから宮沢賢治のことを中心とした研究をしたいと考えていました。ゼミに入ったばかりの頃は、純粋に文学研究をしたいと考えていましたが、木村ゼミは近現代史を研究するゼミなので、宮沢賢治を題材に、歴史と関連付けながら研究できないか、と考えた末、このテーマになりました。	私は、藤田嗣治という人物を、22年間生きてきて1度も耳にしたことがなく、彼の画を見たこともありませんでした。大学生になって、学芸員の授業課題で初めて国立近代美術館を訪れたとき、初めて藤田の戦争画を目の前で見て、とても生々しく、初めは直視することができませんでした。特に「アツツ島玉砕」が衝撃でした。企画展示が変わるたびに国立近代美術館を訪れ、常設展示であった藤田の画を見ているうちに、少しずつその画の前に立てるようにになりました。この衝撃に耐えられるようになるまで、なかなか時間がかかりました。そうやってよく見れば見るほど、何かとてつもないエネルギーを感じるようになってきました。残酷さだけではない、何かを訴えているような強いメッセージ性を感じました。この画を描いた藤田嗣治という人物はどのような人なのだろう、どうしてこんなにも残酷な画を描くことができたのだろう、どういう思いで描いていたのだろう、といった疑問がたくさん湧いてきて、研究したいと思うようになりました。	以前から食文化に興味があり、日本の食について研究したいと思っていました。ゼミでの活動を通して、新宿の伝統野菜であり学習院にも縁がある内藤とうがらしを知り、テーマに選びました。とうがらしなのに、うま味があるということにも興味を持ちました。活動を通して、女子大学以外の学習院関係の方々や、新宿区域の方々、都内の農家の方々と関わりを持つことができたのも、研究を続けるうえで魅力的なことでした。
Q3 作成スケジュール	最終的なテーマが決定したのは、4年生の9月ですが、それまでに何度もテーマを考え直しました。 【3年次】 7～8月: テーマ探しと資料収集 9月: 1回目のテーマ発表会→ポツ 9月～12月: テーマの考え直し 1月: 2回目のテーマ発表会→ポツ 【3～4年次】 2月～5月: 再度テーマの考え直し+資料集め 【4年次】 6月: 仮題目表提出→宮沢賢治とは関係のないテーマで提出 (テーマ提出後、卒業論文は大学生生活最後の集大成のものだし、一生残るものだから、本当に好きなことでやらないと後悔すると思い返し、母の助言もあったため、テーマを宮沢賢治に戻すことに決める。) 7月: 中間報告会→再び宮沢賢治を題材にしたテーマで発表→ようやく方向性が固まる 7～8月: 資料の読み込み+序章執筆 9月: テーマ確定 10月～11月上旬: 資料集めとひたすら読み込み 11月中旬～下旬: さらに資料集め大詰め→ほぼ毎日どこかの図書館に通う +第一章～第三章執筆→先生に添削してもらおう 12月 1週目: 第4章執筆→先生に添削してもらおう 10日ごろ～: ほぼ完成しかけたが、大改正を決心し、0から書き直す 【12月19日: 卒業論文提出】	テーマ自体を模索、決定した時期については、大学3年生の夏頃だったと思います。もともと、藤田嗣治について研究するつもりではなく、ディズニーに関しての論文を書こうと模索していましたが、膨大な先行論文の量に圧倒されてしまい、自分なりの新しい提案や、結論を論文として導き出すことは困難だと悟り、方向転換を測ったのがこの時期だったと思います。具体的な取り組みに関しては、4年生の4月から8月まで資料集めを開始し、9月に本格的に書き始めました。教授に12月上旬に見ていただいて、卒業論文提出期限最終日に提出しました。 【12月21日: 卒業論文提出】	3年生の前期には、内藤唐辛子の普及活動や栽培を行い、内藤唐辛子の特徴を知りました。そして、夏休み中にうまみ成分であるアミノ酸の分析作業を行いました。3年生後期には、引き続き普及活動や栽培を行ったり、アミノ酸分析の結果をグラフ化したりしました。4年生前期には、参考文献や先行研究を読み、論文の構成を考え、4年生の夏休み頃から論文の執筆を行いました。教授に提出したのは12月初旬で、卒業論文提出期限前日に完成しました。アミノ酸の分析にも作業の時間が多くかかりましたが、予想以上に時間がかかったのは、論文を実際に執筆していく作業でした。 【12月20日: 卒業論文提出】
Q4 卒業論文の書き方はどこで修得したか	特別な指導はありませんでしたが、4年生の11月下旬以降の先生との1対1のご指導の中で、資料と自分の立場との距離の取り方などを学びました。	基本、CiNiiなどで先行論文を調べて読みながら、参考にしました。また、ゼミの教授から卒業論文のおおまかな書き方の流れは、教えていただきました。	先輩方の論文や先行研究を読んだりして自分なりに書いた後に、指導教授の先生に添削などをしていただきました。執筆の方法は、指導して下さる先生によっても変わってくると思うので、同じゼミの先輩方の論文を参考にしたり、早めに書きすすめて添削して頂くことが重要だと思います。
Q5 卒業論文を書くうえで、困難に感じたこと	結論がなかなかまとまらなくて苦労しました。先生のアドバイスでもしっくりこなかったため、自分の考えを突き詰めて突き詰めて3日くらい考え尽くした結果、提出締め切り4日前にようやく結論を導くことができました。	とにかく、ここまで長い文章を書いたことがなく、初めての経験ばかりで、何もかもが困難でした。最も困難だったのは、自分で収集したこの情報がどの文献の何ページの何行目から引用したのか、その都度チェックしなければいけなかったことです。書き出した当初は、後々でも問題ないと思っていましたが、それではどうしても何かしら抜け落ちてしまい、進めば進むほど注意しなければいけない点が増えてくるので、後に回せば回すほど大変だということを、中盤に気づき、後半に活かしました。	論文の中での言葉使いや書式などは、これまでに経験のないものでした。同じような研究手法の論文を参考にしたり、周りの先生方に教えていただきながら書きました。テーマの設定に迷ったり研究に行き詰まったりすることもありましたが、頭で考えるだけで焦ってしまうのではなく、まずは執筆や実験や調査など行動に移してから判断すると冷静に状況や方向性を見極めることができました。一度決めたテーマや方法は、少し上手いかわらないと思ってもやり続けることで、次の方針が見えてきました。すぐにテーマを変えたりせず、できるところまでやってみることが大切だと感じました。

氏名	Aさん	Bさん	Cさん
学科(学部生)	日本文化学科	日本文化学科	日本文化学科
所属ゼミ	木村ゼミ	清水(敏)ゼミ	品川ゼミ
Q6 卒業論文に取り組むときのポイント	できる限り多くの資料を読むこと。資料を読めば読んだ分だけ情報が蓄積され、論点の偏りが是正されたり、自分の考えが深まったりするので、資料集めは極限まで突き詰めることが大切だと思います。あとは、体調管理もかなり重要だと思います。最後の1ヶ月半くらいは、精神的にも身体的にも追い詰められますが、自分が追い詰められていることにすら気づけないくらいの状況に陥っていました。とにかく睡眠時間は削らないことを決めて、最高に遅くても0:30までには寝ることにしていたので、何とか身がもったのかなと今になって思います。体調を崩したら逆に何日も棒に振ってしまうことになるので、提出直前ほど、最低限のライフスタイル(食事・睡眠)は絶対に削らないでほしいです。	常に、今自分の論じていることが何かを念頭に置いておくことだと思います。書き進めれば書き進めるほど、自分が書きたいことがわからなくなったり、挙げ句の果て何を論じているのかわからなくなったりします。ただの引用ばかりの論文になりかねないので、導き出したい結論を常に意識することが、卒業論文に取り組むとき、一番のポイントだと思います。	先行研究や資料をたくさん読むこと、早くから行動をして、それについて指導教授などに意見をもらうことです。資料を読むことで、これまでにどんな研究が行われたのか現状を把握し、その上で自分の研究で示したいことを決める事ができます。自分の中で、なぜそのテーマについて研究するのかという軸ができると、論文に取り組みやすいです。そのような軸を持つ学生には、先生方も指導しやすくなるのではないかと思います。
Q7 使用した文献の種類	論文、図書、教科書図書館等で複写した戦後の国語教科書・学習指導要領	借りることはあまりせず、できるだけ購入しました。購入が不可能なものは複写し、自分の手元に確実にいつでもあるように心がけました。藤田嗣治の画集に関しては、ほとんど古本屋さんから購入しました。年代が古いものを扱うことが多かったので、ネットで古本屋さんを検索して、配達してもらっていました。また、教授にも藤田嗣治の図書をたくさんお借りしました。	図書や雑誌論文、関連するゼミの卒業論文
Q8 参考文献入手の際の情報源	CiNii、論文集 図書等に関しては国立国会図書館をよく利用して集めました。あとは、戦後の教科書が研究対象だったので、千葉県教科書図書館や文部科学省内の教育図書館も利用していました。	図書の参考文献リスト。 図録の後ろにも、多くの参考文献が記載されていて、参考文献として使った文献の参考となっている文献は何か、繋げて見てみるのが最も簡単で、確実だと思いました。	論文データベース (CiNiiやGoogleScholarなど) 図書等に関しては、大学図書館や最寄りの東京都北区立中央図書館を利用していました。北区立中央図書館は、公共図書館の中では蔵書も多く利用しやすかったと思います。大学図書館に無い本や貸出中の本が見つかることが何回かありました。国立国会図書館や都立図書館にも行きましたが、頻繁に行くことはできず、また、蔵書が多すぎて思うように資料を見つけられないようにも感じました。テーマにもよりますが、研究の参考にできる本がある程度揃っていて最も利用しやすいのは、やはり大学図書館だと思います。
Q9 卒論でWeb情報を収集・利用する際に気をつけたこと	出典元が公的な機関や、所属の明らかな研究者の論文以外は使用しないようにしました。一次資料が一番だと考えていたので、そもそもあまりWeb情報は利用しないようにしていました。	一回見てしまうと、無意識のうちに自分の意見よりその人の意見が優先される恐れがあるので、ブログ記事にはなるべく近づかないことにしました。また、本当に正しい情報かどうか、常に注意を払うようにしていました。	Web情報は、信頼性の面からあまり利用しないようにしました。国の機関のホームページや内藤とうがらし普及活動のホームページなど、信用ができるものや論文のテーマに関わりの深いもののみにしました。
Q10 失敗(?)をふまえてのアドバイス	私は卒論の原稿の添削、推敲のための先生との面談になかなか行きませんでした(初めに行ったのが4年生の11月中旬)、もっと早く行くべきだったと後になって思いました。完璧にきれいな文章で完成してから行った方が、後がスムーズに進むだろうと思って、ある程度の形として完成するまで行かなかったのですが、むしろ未完成の段階からアドバイスをもらっていた方が、もっとスムーズに構想を立てて、より早い段階からよい文を書けていたと思います。本文の添削の面談は遅くとも11月上旬には行き始めないと、先生からの修正に対応する時間が足りなくなるし、新たに集める資料が発生して大変なことになるので、早めにアポイントメントを取って対策することが重要だと思います。	私の卒業論文の題名は「藤田嗣治の戦争画」ですが、8割が藤田嗣治の生涯の研究で終わってしまいました。踏まえなければいけない情報が多く、なかなかタイトルの本論までたどり着くのに、想像以上に時間がかかってしまいました。人物を研究するということは、情報量が多いことを、もっと早く理解しておくべきだったというのが、大きな後悔でした。	論文の執筆をもっと早くからしていれば良かったです。実験やアンケート調査などを進めていても、執筆を進めていないと後々の負担が大きくなると感じました。また、先行研究をもっと多く読む必要があったと感じています。とうがらしやアミノ酸にかかわるものだけでは少なかったもので、別の野菜の研究なども参考にするべきだったと思います。様々な視点から先行研究を見ることで、より深い内容の論文が書けると思います。
Q11 図書館に期待すること	私は卒業論文作成時に大学図書館は利用しなかったのですが、卒業論文作成が終了してY氏賞受賞論文が館内閲覧できることを知り、Y氏賞応募の参考のために読みました。これらを卒論を書く前に読んでいたら、構成を立てる際の役に立っただろうなと思いました。また、ジャンルナレッジなどの機能が使えることも、直前になってからゼミの友達に聞いて知って利用し始めました。本当に役に立ったので、もっと早く知ることができたなと思いました。直前まで知らないことが多かったので、図書館で利用できるサービスをもっと積極的に発信してもらえたらなと思います。	卒業論文を書く上で、先行論文はとても重要。CiNiiで検索をかけた時、ネット上に載っていない論文も多く存在する。そういうとき、図書館の方にCiNiiの中で見つけた論文を閲覧したいことを伝えると、すぐに持ってきていただけました。研究は、孤独だし、自分の世界に入ってしまうがちだと思いますが、そういうとき、図書に詳しい方々と話すことは、心の支えにもなると思います。	公立図書館よりも研究のための文献が豊富に所蔵されていると感じました。また、他大学の文献も検索できたり取り寄せられることは大きいと思います。各ゼミの論文作成に役立つような文献の紹介や、卒業論文のための文献は貸出期間を長くできるなどのサービスがあるととても良いと思います。